

# 現代語日本語口語表現の個人差に関する研究

グリフィン・シュヴィーゾー<sup>1,a)</sup> 山元 啓史<sup>2,b)</sup>

**概要：**本稿では、現代日本語口語表現の個人差について述べる。要因毎（記述方法・質問方法・性別など）に日本語の母語話者から得られたデータを、フォーム記載提出によって収集した後、各個人が使用している表現とスピーチスタイル（カジュアル・フォーマル）を分析し、語句別、パターン別の分類を比較した。

## A study on individual differences in contemporary Japanese colloquial expressions

GRIFFEN SCHWIESOW<sup>1,a)</sup> HILOFUMI YAMAMOTO<sup>2,b)</sup>

**Abstract:** This paper addresses the issue of individual variety in colloquial speech of contemporary Japanese. After conducting short interviews with native Japanese speakers across a variety of controlled groups (such as age and gender), the expressions and speech styles used by each individual were analyzed and the variances were compared to determine their significance.

### 1. はじめに

本稿では、現代日本語における口語表現の違いについて述べる。日本語の表現は、話し言葉、書き言葉などの伝達方法によって異なり、また個人差がこれらの違いに及ぼす影響も異なることが予想される。上記を明らかにするために、語順、語種、間投詞使用の有無が話し言葉と書き言葉の間で一貫しているかどうかを検討する。

### 2. 方法

日本語の口語パターンの抽出を試みる。調査は主にデータ収集、データ解析およびデータ分析の3つの手続きによる。直接書く、口述筆記、音声認識の3種類のデータを収集する。データ収集に、実験参加者に同じ3つの質問を実施し、その回答をオンラインフォームに送信するよう依頼する（表1）。ただし、参加者に回答を求める方法は異なる。1）回答を直接フォームに入力する、2）回答を一旦録音

し、それを自分で書き起こした後、そのテキストをフォームにペーストし、送る、3）音声認識ソフトウェアを用い、カジュアルスタイルで答えを話した結果をフォームにペーストし、送る、の3種の方法を用いる。これらの3種の方法で具体的な質問をし、言語の認知面および情緒面にも変化があるかどうかを検討する [1]。

表1 実験参加者に聞いた3つの質問文

番号	内容	質問文
1	事実面	今日の授業で何をしましたか。
2	認知面	今日の授業で何が分かりましたか。
3	情意面	今日の授業で面白かったことは何ですか。

記載方法（筆記・録音・音声認識）による違い、フォーマル、カジュアルの違い、性別の観点からデータを調査する。データ収集後、形態素解析器 MeCab を使用し、単位分割し、解析する。日本語口語の特徴的な表現に焦点を当てるために名詞と動詞を排除し、筆記・口述毎で語句を分類する [2]。以上により、筆記のみに見られる語句、あるいは口述のみに見られる語句に分け、それぞれの出現パターンの収集を通して、話し言葉の特徴的な発話パターンが分析できると考えられる。

<sup>1</sup> ワシントン大学  
4014 University Way NE, Seattle, WA 98105-6203

<sup>2</sup> 東京工業大学  
〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1

<sup>a)</sup> griffens@uw.edu

<sup>b)</sup> yamagen@ila.titech.ac.jp

### 3. 結果

上記の手順にしたがって、言語の様々な側面が調べられるように、次の3つの主要な分析結果が得られた。記載方法（筆記・録音・音声認識）毎に固有な語句が見られたが、記載方法毎における語句の共起パターンを調査したところ、単独に見られる語句よりも特徴的なパターンが見られた。さらに、性別毎に特徴的な語句を検討するために、性別間に語句どの程度異なるのかを調べた。

#### 3.1 特徴的な語句

名詞と動詞を除外し、用語を分類したところ、各カテゴリーで最も使用されている語句が抽出できた（表2）。

表2 口述データ、書記データに共通して見られる語句上位10種

順位	口述データ		書記データ	
	頻度	パターン	順位	頻度
1	49	えー	7	あり
2	45	とか	6	を通して
3	36	って	5	に関する
4	26	っていう	5	なけれ
5	25	けど	4	のみ
6	24	だけ	3	すみません
7	24	えーと	3	面白
8	23	たい	3	そこで
9	21	…	3	ものの
10	18	まず	3	興味深かつ

口述データで見られる最も一般的な語句は、フィラー「えー」「えーと」と「とか」「など」であった。しかし、書記データでは、フィラー他、口述データで見られる要素はあまり一般的ではなかった。その代わり、動詞や形容詞などの内容語が最も中心的に見られた。

#### 3.2 共起パターン

データに見られた語句のうち一般的な共起を調べた。それらを表3に示す。

表3 口述データ、書記データに特徴的に見られた語句上位10種

順位	口述		書記	
	頻度	パターン	順位	頻度
1	15	とか-し	2	あり-ものの
2	14	ん-し	2	のみ-あり
3	14	えー-し	2	に関する-あり
4	13	まず-し	2	なかなか-あり
5	13	けど-し	1	そこで-面白
6	13	って-し	1	ものの-そこで
7	13	だけ-し	1	興味深かつ-面白
8	12	とか-ん	1	あり-そこで
9	12	たい-し	1	に関する-そこで
10	11	とか-けど	1	に関する-ものの

口述データで見られた接続助詞「し」は上位10の頻度

の高い共起パターンのうちの8つで見られた。一般的に「し」は列挙を示すために使われ、「とか」と同様に、それを使い、文の終了にも使うことができる。しかし、書記データでは、「あり」「そこで」が最も頻繁に見られた。

#### 3.3 性別による使用語句の違い

表4のように性別による使用語句に特徴的なパターンが見られた。当初、母音の長さや声の調子など、様々な要因によって、話者の年齢や性別を区別できることが分かるので、男女の話者の間にも字句の違いがあるかどうかを検討したが、調査を通して、男性と女性の違いがほとんどないことが示された。

表4 性別毎に特徴的に見られた語句上位10種

順位	男		女	
	頻度	パターン	順位	頻度
1	16	だっ	4	すごく
2	16	…	4	あ
3	12	より	3	なあ
4	11	ず	3	結構
5	11	高い	3	を通して
6	10	どういう		
7	9	例えば		
8	8	とても		
9	8	あり		
10	8	えーっと		

#### 3.4 実験参加者による内省

研究の一環として、実験参加者に自分の書き言葉と話し言葉の違いについて考察してもらった。彼らの内省中に共通的に見られたものは、話す際、明確な意味を持たない間投詞や他のフィラーなどの語句が使われるということであった。さらに、文法規則では明確に定義されている語順については、話し言葉の語順は変動するように見えた、という。しかしながら、ある参加者は、「内容に直接関係のない単語は、しばしば口語で挿入されるが、それらがコミュニケーションとして自然なものにすると感じました」と、語順の変動やフィラーの挿入はかえって言語をより自然すると述べている。

### 4. 考察

調査結果により、書きことばと話しことばの用語の間には明らかな違いが見られたが、性別による語彙の違いはそれほど顕著ではないことがわかった。実験参加者の内省を分析すると、言語の記録方法が変わっても、言語がどのように変わるのかあまり意識していないことがしばしば観察できた、と述べている。話しことばとして聞いていて、丁寧語などが普通に使われているように感じていても、文字に書き起こして読んでみると、実際は丁寧語について配慮

できていない部分がたくさんあることに気づいた、と述べている。

#### 4.1 話し言葉におけるフィラーの使用

接続助詞「し」自体は一般的なトークンではないが、共起パターンの上位 10 のうちの 8 つに現れている。多くの実験参加者は、「し」や「とか」のような語句はしっかりした意味を持たずに使われているが、話している間に考える時間を作るために使われたとコメントしていた。これらのフィラーは話しことばでの日本語の語順がいかに動的であるかを示している。「し」「とか」のような語句を文に挿入することで、日本語の文を中断させることができ、かつ、話者が何を言っているのかを文脈的にも理解することができる。

#### 4.2 日本語話し言葉での語順

一般的に日本語は SOV（主語-目的語-動詞）言語と見なされてはいるが、フィラーを使用し、考える時間を稼ぐことを利用しながら、話者が最初に頭に思いついたことから、話して文を構成することができる。実験後、ある実験参加者の内省には、話し言葉は、通常は文の最後にあるはずの述語でさえも、序列関係なく使われている、と述べられていた。

#### 4.3 書き言葉の動詞における連用中止法の使用

特にフォーマルな文体で書かれた日本語では、文を接続するのに使われた動詞の活用形（いわゆる、「食べて」「飲んで」のテ形）は、連用中止形（「食べ、」「飲み、」）に置き換えられている [3]。

### 5. おわりに

母語話者より、話し言葉、書き言葉の日本語データを収集した。それらのデータは話し言葉と書き言葉の間の明白な語彙のちがだけでなく、カジュアルとフォーマルなスタイルも明らかにした。さらに、話し言葉における日本語の語順は一般的に SOV と言われるほど厳密ではないことが分かった。

#### 参考文献

- [1] Schwarz-Friesel, M.: *Language and emotion*, pp. 157–174 (online), DOI: 10.1075/ceb.10.08sch, John Benjamins Publishing Company (2015).
- [2] Yamamoto, H.: Lexical Modeling of Yamabuki (Japanese Keri) in Classical Japanese Poetry, *JADH2013 DH-JAC2013 Conference Abstracts* (2013).
- [3] 北上光志: 現代日本語動詞の連用形とテ形の談話機能の違い, 日本言語学会第 114 回大会 (1997).